

令和4年度大阪府福祉基金地域福祉振興助成金地域福祉推進助成「事業評価」(事業概要)

団体名	社会福祉法人 大阪ボランティア協会	総合評価 S	評価基準(総合評価)
事業名	「インクルーシブボランティア」のコーディネーションモデル構築事業 ～誰もが参加できるボランティア活動の支援体制づくりに向けた啓発～		S (非常に高く評価できるもの)
実施期間	2022年4月1日～2023年3月31日		A (高く評価できるもの)
助成(実績)額	5,000,000円		B (一定の水準にあるが一部課題のあるもの) C (一定の水準にあるがかなり課題のあるもの) D (全般的に多く課題のあるもの)

事業概要	事業実績	事業を実施したことによる成果
<p>近年、地域のボランティアセンター等の中間支援組織には、コミュニケーションなどに課題を抱える当事者からボランティア活動をしたいという相談が多く寄せられている。NPOや地域組織、福祉施設などの活動先でも、対応に困ったり、当事者の力を十分に発揮できるプログラムを開発できず、有効な参加支援が難しいと感じたりしているコーディネーターが多い。</p> <p>本事業は、コミュニケーションが苦手などの理由で社会参加に制約がある人も、その人らしさを大切にしながら参加できる「インクルーシブなボランティア活動(インクルーシブボランティア)」について、現場のボランティアコーディネーター(ボランティアリーダーを含む)に広く啓発を行うことで、「誰もが参加できるボランティア活動」の環境整備を進めることを目的とする。</p> <p>この目的の実現のためには、インクルーシブなボランティア活動プログラムを開発し、多職種連携により、参加を支えるコーディネーターを増やし、ノウハウや事例を共有できる環境づくりが必要不可欠であると考えている。</p> <p>そこで、3ヶ年の中で、インクルーシブなボランティア活動のコーディネーションの視点や具体的な対応方法について体系的に整理し、現場のボランティアコーディネーターの意識と対応力が向上するような啓発資料の作成と、それを活用した研修プログラムの開発を行う。</p> <p>また、そのプロセスの中で、ワークショップや研修等を開催し、インクルーシブなボランティア活動のコーディネーションを目指すコーディネーター同士のネットワークを形成することを目指す。</p> <p>本事業を進めることにより、「ボランティア活動」という領域を超え、誰もが自分らしさを大切にしながら安心して過ごせる居場所や役割を持つ中で感じる生きがいを得られるため、地域共生社会の実現や孤立・孤独の抑制に寄与したいと考えている。</p>	<p>1. インクルーシブボランティア推進プロジェクト企画チーム会議の開催(年6回) インクルーシブな視点のボランティア活動現場を持つNPO、精神保健福祉の専門職、地域福祉の研究者、障害のある当事者などで企画メンバーを構成し、事業全般の進め方や現地視察先の選定やヒアリングの企画、コーディネーター向けサロンの企画・運営、啓発パンフレットの内容検討などを行った。</p> <p>2. 誰もが参加できるボランティア活動現場の視察(4か所) 誰もが参加できる場づくりやプログラムづくりを行っている施設、団体について、活動の際のルールづくりやスタッフの対応に関する工夫などを伺い、インクルーシブボランティアの環境づくりのために必要な要素を抽出した。</p> <p>(1) 京都市南青少年活動センター(京都市南区) 日時: 2022年11月28日(月) 11:00～12:30</p> <p>(2) はっぴーの家ろっけん(神戸市長田区) 日時: 2022年12月9日(金) 15:00～17:00</p> <p>(3) nimo alcamo(ニモアルカモ)(大阪市東住吉区) 日時: 2022年12月14日(水) 10:00～12:00</p> <p>(4) モモの木(堺市北区) 日時: 2023年3月10日(金) 16:00～17:30</p> <p>3. 現場のコーディネーターを対象としたサロンの開催(年2回) 「人との関係づくりが苦手な人や『参加』への制約を抱える人へのボランティア活動支援とは?」と題し、現場のコーディネーターへの「インクルーシブボランティア」の考え方について啓発するとともに、現場の課題と工夫を共有した。</p> <p>・第1回 2023年1月24日(火) 15:00～17:00 (参加者) 一般28人、企画メンバー6人、事務局5人 (話題提供者・アドバイザー) 関西国際大学 岩本 裕子さん NPO法人わかもの国際支援協会 横山 泰三さん 社会福祉法人ストローム福祉会 山王こどもセンター 田村 幸恵さん</p> <p>・第2回 2023年2月22日(水) 10:00～12:00 (参加者) 一般26人、企画メンバー1人、事務局5人 (話題提供者・アドバイザー) NPO法人DDAC 広野 ゆいさん</p>	<p>1. 「インクルーシブボランティア」の新たな捉え方への拡がり 企画チームで対話を重ねる中で、障害がある人たちが主体性を持って自分たちで立ち上げる「セルフヘルプグループ」の意義について再確認することができた。施設や団体などの既存の活動に配慮が必要な活動希望者を受け入れるだけではなく、当事者が必要なサポートを受けながら主体的にセルフヘルプグループを立ち上げ、運営していけるためのボランティアコーディネーターの役割の重要性を再確認することができた。</p> <p>2. 「インクルーシブボランティア」の環境づくりに必要な要素の抽出 誰もが参加できる場づくりを行っている現場の視察を行うことで、ボランティア活動参加者や事業対象者への対応で、現場のスタッフが意図的に行っている工夫や、当事者を枠に当てはめずに自由にその人らしさを発揮できる環境をつくっていることなどについて、実際の現場の空気に触れながら聞き取ることができた。次年度以降、インクルーシブボランティアのコーディネーションに関する教材を作成・普及していくにあたって、重要となる視点や要素について抽出し、整理することができた。</p> <p>3. 現場のコーディネーターが抱える課題の明確化とさらなる波及効果 コーディネーターを対象としたサロンでは、「インクルーシブボランティア」の概念や事例を大阪府内で活動する多様な関係者に伝えることで、これまで大阪市内に留まっていたつながりを広げることができた。また、コーディネーター自身が抱えている課題が明確になると同時に、コーディネーターが悩みを共有し、その解決策について意見交換や事例の共有などができる場が不足していることがわかり、コーディネーター同士、コーディネーターと障害者支援やメンタルサポートの専門職とのネットワーキングを行う必要性が見えてきた。後日、サロンの参加者から企画メンバーに地域住民向けに話題提供してほしいと打診があり、年度内に講師派遣を行った。企画チームメンバーも、それぞれの活動現場や講演活動等で、「インクルーシブボランティア」の啓発を行っており、さらなる波及効果が現れていると言える。</p> <p>4. 参加に制約のある当事者の参画による、「支援する側」「支援される側」という関係性を越えた活動の場づくり 今回、参加に制約のある当事者へのヒアリングにより、参加しやすい活</p>

4. 参加に制約のある当事者へのヒアリング (計6回、延べ13人)

企画メンバーが関わっている団体や活動現場のメンバーに協力を依頼し、当事者にとって心理的安全性が高く、話しやすい活動拠点にて、個別でヒアリングを行った。

協力：NPO 法人モモの木、NPO 法人 DDAC、NPO 法人わかもの国際支援協会

5. インクルーシブなボランティアプログラムの開発とモデル実施 (年3回)

3人の当事者の協力を得て、ひとりひとりの「チャレンジしてみたいこと」「活動の中で配慮が必要なこと」を踏まえてプログラム開発を行った。

・第1回 2023年3月5日(日) 16:00~17:30

発達障害がある当事者の自助会の立ち上げに向けた準備のための会議を行った。

・第2回 2023年3月24日(金) 17:00~20:00

地域の居場所「モモの木」にて、知的障害・精神障害がある当事者が受け、拠点で活動している子どもスタッフと一緒にお弁当の配布の活動を行った。

・第3回 2023年3月31日(金) 16:00~19:00

地域の居場所「モモの木」にて、知的障害がある当事者が居場所で販売するお菓子のラベルづくりやラベル貼り作業を子どもスタッフと一緒に行ったり、お弁当を取りに来た住民の誘導を行った。

6. インクルーシブボランティアの考え方について伝える啓発パンフレットの作成と配布

(配布部数) 3000部

(配布先) 大阪府内の社会福祉協議会、市民活動センターおよび大学ボランティアセンター

合計100ヶ所、大阪府内で活動する市民活動団体、サロン参加団体50団体

動現場の要素について聴くことができ、支援者目線ではない「インクルーシブボランティア」のコーディネーションモデルの今後の普及・啓発に向けて重要な視点を得ることができた。また、プログラムのモデル実施に際しては、当事者ひとりひとりの希望に寄り添った活動プログラムを実施したことで、当事者ならではの視点から意見の発信があり、ボランティアを受け入れる現場のスタッフにとっても、新たな気づきやボランティアマネジメントの理解につながったと考えられる。

5. 「インクルーシブボランティア」の概念やコーディネーターの視点の普及啓発

啓発パンフレットの作成および配布により、ボランティアコーディネーターを中心としたより多くの関係者に向けて、「インクルーシブなボランティア活動(インクルーシブボランティア)」の概念や、活動において重視したい視点について普及することができた。

現場のコーディネーターからは「はじめてインクルーシブボランティアという言葉聞いた」「コーディネートする上では、非常にありがたい資料」「現場視察レポートや当事者インタビューがあるとイメージができてよい」といった評価を得られるとともに、パンフレットを送付したボランティア団体からは、「パンフレットを拝見して、書かれた意義、目的に、とても感銘を受けた。私自身もそんな活動の一助を担うことができたなら素晴らしいと、夢を抱いています」という反応も寄せられており、これまで「インクルーシブボランティア」という考え方があることを知らなかったという関係者にも、広く啓発を行うことができた。



インクルーシブボランティアの考え方について伝える啓発パンフレット